

あづまぢの濱名のはしのはし柱なみはおれどもまだたてりけり

永縁

いまはみなはし柱さへ朽はて、濱名ばかりをき、わたるかな

〔詞花和歌集十〕藤原實宗常陸の介に侍りける時、大藏省のつかひども厳しくせめければ、匡房に

いひて侍りければ、遠江にきりかへて侍りければ、いひ遣しける、

太皇太后宮肥後

つくば山ふかくうれしとおもふかなはまなのはしにわたすこゝろを

〔夫木和歌抄二十一〕遠江守になりてくだり侍りけるに

大藏卿爲房

都にてき、わたりしにかはらぬははまなのはしの松のむら立

〔源平盛衰記三十九〕重衡關東下向附長光寺事

十日元暦元年三月本三位中將重衡卿ハ、兵衛佐源頼朝依被申請、梶原平三景時ニ相具シテ關東へ下向、

略中濱名ノ橋ヲ過行ケバ、又越ベシト思ハネド、小夜中山モ打過テ、宇津山邊ノ蘿ノ道、清見ガ關

ヲ過ヌレバ、富士ノスノ野ニモ著ニケリ、

〔源平盛衰記四十五〕内大臣關東下向附池田宿遊君事

高師山ヲモ過ギヌレバ、遠江國橋本ノ宿ニ著キ給フ、眺望殊ニ勝レタリ、略中濱名ノ橋ノアサボ

ラク、駒ニ任セテ打渡リ、池田ノ宿ノ長庚ニ、今夜ハ是ニ宿ヲ取、

〔續後拾遺和歌集九〕都よりあづまへかへり下て後、前大僧正慈鎮のもとへよみてつかはし

ける歌の中に、

前右大將頼朝

かへる波君にとのみぞことづてしはまなのはしの夕ぐれの空

〔海道記〕十日貞應二年四月夕陽の影の中に、橋本の宿にとまる、略中夜も既に明ゆけば、星のひかりは